は因襲的な宗教心を持つて居たが、最後に至つて邪教的に變じて居る。けれども此の作中最もペーガンなのは恐らく僧侶自身であらう。

「聖の井」(The Well of The Saints)に至つて作家の筆は更に熟した。此れに現はれた神秘と象徴と現實の三色の中では、現實の色が最も濃い。空想に生きる愛蘭人の性格と、現實暴露の悲みとは此の中に描かれて居る。其の前半に於て極めてキャソリック風であつたのが、最後に至つて邪教的に變じて居るのは、前の「ティンカーの結婚」と同樣である。

「聖の井」は過般坪内博士の飜案に依つて「靈驗」といふ名のもとに我が國に移し植えられた。

マーティンとふふ醜い盲目の乞食が居た。彼はメリーと呼ばれる五十近い、此れも盲目の醜い女乞食と夫婦に成つて長い間を過して居た。多くの村人達は二人をいろ〳〵にからかつて、遂に自分達が二人とも非常に美しい顏容を持つて居るといふ確信を此の盲目の夫婦に抱かしめる。二人は想像を喜ぶ愛蘭人であつた。男は女の美しい顏や、髪の毛を頭に描き、同樣に女は男の凛々しい樣子を想像して、一目互ひの姿を眺め合いたいと日夜望んで居た。ところがある旅の聖僧が二人の住む村を通り掛つて、聖の井の靈水の奇特を以て、此の夫婦の目を開けてやつた。多年の希望を果した二人は決して幸福ではなかつた。二人はお互ひに夢想さへしなかつた醜惡な姿を眺め合つて憤つた末、到頭別れてしまつた。けれどもやがて靈水の力が衰えたゝめ二人は再び目を失つてしまふ。そして路傍で此の頼りない二人は偶然出遇つた。明を失した二人は不思議な變化を

頭の中に起して、また以前の共同生活に戻る事と成る。此の日先きの聖僧が再び此地を通つた。そして二人が再び盲目に成つて居るのを見て、また靈水の不思議をあらはさうとした。けれども二人は此れを辭つた。そして却て聖僧を嘲つて、此の塲を去つてしまふ。汚い不愉快な現實を目のあたりに見て暮す生活よりも、愉快に勝手な美しい想像の中に生きる事の出來る盲人の生活を彼等は欲したのである。最後の幕でマーティンは普通の人間の肉眼に映る景色よりも、遙かに美しく、大きい景色が我々盲人の心眼に映じると誇つて居る。

「聖の井」は新らしい神秘劇である。現實味の多い神秘劇である。テクニックから云つても極めて整つて居る。

「プレイボーイ」(The Playboy of the Western World) ぐらい問題を惹き起した作も尠い。「プレイボーイ」といふ言葉は日本語に譯し方が無い。此れは字義通り或る遊戯のチャンピヲンといふ樣な意味も持つて居るし、遊戯心の多いものといふ意味も含んで居るのであるから、唯「いたづら者」とだけでは意が滿たない。それから「ウェスターンウァールド」は「愛蘭の西海岸」を指すものである。仕方がないから冗長で不滿足な「西海岸のいたづら者」といふ名を用ゐずに、一般に云はれて居る「プレイボーイ」といふ名を自分は取る。

「プレイボーイ」に至つてシングは其の幻想的な筆致を以て、强い現實描寫を試みたのである。

此の作の主人公をクリスティマホンと云ふ。彼は其の父親を撲り倒して、村を出發し、數日を漂浪した後、西海岸のメヨに辿り着いた。彼は此の村の居酒屋

で、人々の間に答えて、父親を殺して來たといふ。此の恐ろしい言葉に却つて人々の畏敬を受けた彼は其家に泊り、そこの娘のペギーンと戀に落ちる。ペギーンは許婚の男を棄てゝクリスティと結婚しようとして、既に父親の許しを得た。ところへ頭に繃帶したクリスティの父親老マホンが不孝の息子のあとを追つて此の村に辿り着き、偶然クリスティの姿を見掛けた。總べてが明白に成つた。クリスティの今迄の虚言にペギーンは激怒した。クリスティは再び父親を撲る。けれども父親を殺すといふ事實は、全く想像と反對に恐ろしく、醜い事であつたのを知つて、村人のクリスティに對する種々の幻想は一時に消滅してしまつた。彼等はクリスティを縛る。老マホンは此れを見て、怒つて其の縛を解き、息子を促して此の場を去る。

シングは此れをコメディと名附けた。けれども一般の觀客は作家がどの程度迄眞面目なのかを知るに苦んだ。

自分は幸ひアベイ座の人達に此の作が演ぜられるのを見た。其の時の樣子では、此れは多くの倫敦人には一種のエキストラヴガンザとして見られて居る樣であつた。此の作は愛蘭でも可成り問題を起し、特に亞米利加に於ては非常な反對を受けた。此の作が亞米利加で演ぜられた時の觀客の妨害は餘程甚しかつた相で、此の時の騒動の有樣はレディグレゴリーの「我等の愛蘭劇場」に委しく記されて居る。シングの病の重く成つたのは、全く此の騒動に惱まされた結果であると、一般に云はれて居る。此の作のモーティヴは別として、たゞコメディとして此れが優れた作品だといふ事は疑ふ餘地もない。ジョージモアは此れを「此の二

百年間に現はれた最も重要なコメディ」であると賞讃した。如何に空想を好む人々の間でも、父親を殺した若者が此の作に見る樣な歡待を果して受けるかどうか自分には解らない。アイロニイとユーモアを好んだ作家は隨所に此れを用ゐて居る。プレイボーイのクリスティ自身が既に空想的な愛蘭の青年である。一寸した虚言がもとに成つて一個の青年が、擴大する想像に引きづられて詩人の如くに變じてしまつた。彼の話を聞いた人々は誰も、美しい、立派な方へのみ勝手な想像の力を伸ばして、此の青年を一個の勇士にしてしまつた。「父親を殺す」といふ事が「快感」や「美感」を與えるといふのは少し首肯し難い事であるが、假りに之れを許せば最後に其の事實に面した人々が全く反對の「惡感」に憤つたのは無理もない。こゝにも現實の曝露が齎らす不快がある。

すべては想像である。幻想である。「父親を殺した」といふ事で直ちに其の青年を愛した娘のペギーンが「殺さない」といふ事を聞いて忽ちに、此れを嫌ふといふのは間違つて居ると云ふ人があるかも知れない。けれどももとペギーンの見て居た青年クリスティは、幻想の中に動く勇士であり、詩人であつた。それが現實の曝露と共に、彼の身邊からは總べての美しい影が飛び去つてしまつた。ペギーンが此のつまらない一青年を嫌つたと云ふのも無理ではない。ペギーンは青年の虚言を怒つた。けれども最も深く感じたの幻影破滅の悲みであつた。

美しい言葉に富んだシングは、倦く迄も美しい言葉を三幕目のペギーンとクリスティの戀の對話に披瀝して居る。

作家は始め序幕にクリスティが父親を撲り倒す畑の塲を書き、且つクリスティ

とペギーンとの結婚式の時に、其の會堂の所へ老マホンを出す計畫だつたのだ相であるが、アベイ座の舞臺の狹小なのと、經費を要する點からとで、やめにして、三幕共同し場面を用ゐる事にしたのだといふ。

此の作に出るペギーンの許婚のショーンケヲといふ若者は如何にも愚である。元氣ある强壯な若者が年々亞米利加に渡航してしまふために、此の樣な不活動の青年のみがあとに殘るといふ事も亦作家が現はさうとしたことの一つだつたらしい。要するに「プレイボーイ」は極めて整つた且つ普通の喜劇や社會劇と全然趣きを異にした傑作である。

「悲みのデアドラ」(Deirdre of the Sorrows) は最後の作で、且つ未完のものである。デアドラは愛蘭の口碑に知られた美しい且つ哀れな女である。

愛蘭の作家で此の話を其の作の材としたものは、イェーツを始め二三ある。しかもどれもシングの此の三幕の悲劇には及ばない。自分は可成り種々の戯曲を讀み且つ見た。けれども此の作の最後の幕の後半部程の强さと美しさと喜びとを持つたものに接した事が無い。此の點から、未成品ではあるが、此の「デアドラ」は自分の好む此の天才の作品中での最も愛好する作である。

デアドラはアルスターの王コノチャーに愛せられたが、彼女は此の老いた王を棄てゝ若い美しい熱のある勇士ナイシの手を取つた。彼等はアルバンの島に逃れて、七年の間樂しい美しい、愛情生活を送る。此の七年の後二人は欺かれてコノチャーの領内に歸る。こゝで老王の奸計のためにナイシは其の二人の弟と共に殺された。デアドラは塚穴の中に横はる愛人の姿を見て、己れも短刀で胸を

貫き、其の穴の中に同じく落ち込んで死んでしまふ。三人の勇士と愛する女の死とを見て老いた王は急に衰えてしまふ。

此れは自分の友人の云つた樣に森に泣く女の悲しい勝利の微笑を中心として綴つた哀史である。又老衰を嫌惡して若い僕に散り行く花の哀史である。

シングはデアドラの唇を借りて「たとえ一瞬時でも最良な且つ最も褞福なものを己れのものとする事はうれしい事である」（It should be a sweet thing to have what is best and richest, if it's for a short space only.）と己れの信ずるところを云はしめて居る。「ラインカーの結婚」や「聖の井」で作中の人物の行爲が邪教的なのにも關らず、キャソリック風の觀念の認め得られるのに反して、此の「デアドラ」では全然此の事が無い。

デアドラの死は勝利の死である。彼女が短刀に其の胸を貫く時、彼女に取つて愛は至高のものと成つて居る。彼女の死は勝利であつた。しかも此れに依つて得られる喜（ジョイ）は限りなく悲壯のものである。

「悲みに終ると豫言されて居た私は、いつも喜びに充ちて居りました。でもナイシ樣あなたのおそばに參るのには冷たい國に參らなければ成りませぬ。そして今宵は今迄度々私の頸を温かに抱かれた御手も冷たい事で御座いませう……聞こえない耳に囁くのは悲しい事で御座います。王樣あなたは今宵エメーンで物哀れな事をなさいました。けれども生命（いのち）と時間（とき）の終りに、喜びと勝利が御座います。」

It was sorrows were foretold, but great joys were my share always; yet it is

a cold place I must go to be with you, Naisi; and it's cold your arms will be this night that were warm about my neck so often ..... It's a pitiful thing to be talking out when your ears are shut to me. It's a pitiful thing, Conchubor, you have done this night in Emain; yet a thing will be a joy and triumph to the ends of life and time.

此の樣な悲壯な言葉をあとにしてデアドラは塚穴の中に落ち入るのである。

作はデアドラの乳母ラヴルチャムの悲しく淋しい言葉に終る。

「デアドラも死に、ナイシも死んだ。樫の樹や星屑が悲みに死ぬものなら、今宵エメーンの空は暗く、地は堅く、裸はな事だらう。」

「悲みのデアドラ」に優れたのは其の中に横溢した美、詩、感情の巧みな錯雜にある。詩趣の豊かな悲劇としての此の作は近代劇中比肩すべきものがないと云つても過言ではない。

前に記した樣にシングは千九百九年の三月ダブリンに逝つた。ジョージモアは「英國評論（イングリッシュレヴュー）」に掲げた「イェーツとレディグレゴリイとシング」といふ一文中にシングの臨終の事を書いた。それによると、彼は常に散歩に行つて思索に耽つた或る山を生前に一目見たいと欲した。そして寢臺を窓際に持つて行かせたが、窓が高いために寢て居ては見えなかつた。而かも其の時彼は到底立上がる氣力が無かつたゝめに、此の最後の望みは達せられずして、涙を浮べながら彼は遂に死んだといふ事であつたと覺えて居る。山の名は忘れてしまつた。

シングは詩人であつた。「悲みのデアドラ」の如きは最も其の本領を發揮した

ものである。彼は繪の樣な傳說、詩の樣な人情に親み、特に想像を好んで、此れを養ふユーモアを必要とした。そしてイプセン其他の獨逸人の乾燥な社會劇を嫌ひ、敎訓的(ダイダクティック)な劇を以て最も劣等なものとした。此等の思想は千九百七年の十二月に書かれた「ティンカーの結婚」への序文に、判然と現はれて居るが其の中でも「解剖學者は其のプロブレムを以て、敎師等は其のシステムを以て、古代ギリシャの藥方の如く舊式に陷つてしまふ。——イプセン及び獨逸人等を見よ——」といふ一節は最も痛快に解剖的、敎訓的の劇を罵つたものである。

シングの天分中最も感嘆すべきは、米國の批評家ウェイガントの云つた如く「經驗と、生活に對する夢(ドリーム)を美化して其の作品とする」といふ事にあると思ふ。

デアドラがアランの島を去つたのは、空しく老衰する事を欲しなかつたゝめであり、「谷の影」のノラも若い男にウィスキイを注ぎ乍ら「年を取るのは悲しい事でまた本當に奇妙な事だ」と語つて居る。かゝ老衰を嫌つたシングに取つては四十年に足らぬ生涯も、決して短かゝはなかつたかも知れないが、我々としては彼が更に數年の充實した裕福な生活を送つて、假令あと一つだけでも多く作品を遺して行つて呉れたらばと思はないわけにはゆかない。

一つ〳〵の作每に變化を示し、一つ每に圓熟の境に進んで來た此の作家が「デアドラ」の次ぎに、どういふものを書いたらうかを考へるのは興味多い事である。エドワード、ストーラーのいふところに依れば最後の作に至つて、シングは從來用ゐて居た言葉がデアドラの口にするのに適さない事を發見して、更に一段の考究をしたのだ相である。從つて若し彼が十年生き延びて更に何種かの作

品を出したならば「悲みのデアドラ」が或ひはターニングポイントと目される事に成つたかも知れない。

けれども彼は六つの戯曲を遺した。彼の眞價の定まるのは恐らく何十年の後の事であらう。然し彼が十九世紀末より廿世紀の初期に掛けての最大の劇作家の一人であるといふ事だけは、今に於ても斷言し得る事と自分は信じて居るものである。

ウィリアム　バットラー　イェーツ

Willam Butler Yeats

傳說の愛蘭、詩の愛蘭は、ダブリュー、ビー、イェーツの力に依つて、新らしい姿と成つて我等の前に現はされた。イェーツは始め詩人であつたが、中頃劇作に心を轉じて、今日に至つて居る。自分はまだ餘り彼に就て深く知らない。從つてこゝには自身讀んだ彼の戲曲に對する感想を書くより仕方がない。

愛蘭の劇作家は皆其の作品が、鄕土の傳說や、實生活から材を取つた粗朴な鄕土的なものであることを以て知られてある。此間にあつて詩人たるイェーツの作には一種特有な性質を持つて居る。第一に彼の作は極めてイマジナティヴなものである。彼の作は大低短かい。而かも其の短かい中に限りない詩趣を含んで居る。ヨーロッパの劇作家の作品中、其の詩的の香ひの純粹な點に於て、イェーツのものに若くはない。イェーツに描かれる人物は、皆遠い想像の國に動いて居

る樣にも見える。彼等は大低神を信ずる心が深い。そして皆單純である。更にどの作品にも愛蘭特有のユーモアが認められる。レディグレゴリイにしても、シングにしても皆イェーツと同じく地方的な題材を扱つて居るが、其の扱ひ方には非常な相違がある。イェーツのはすべて詩的で、何となく縹渺とした趣きを有し、時として神秘的な香ひをも持つて居る。たゞイェーツも他の二人も其の作品が「鄕土の愛」のために書かれて居る點だけは同樣である。

自分は先づ詩劇「カウンテスキャスリン」(The Countess Cathleen) を讀んだ。此れは時代を昔の愛蘭に取つたものである。一篇の中心と成つて居るのは、自己を犧牲にする貴い行爲である。伯爵夫人 キャスリンは氣高い婦人であつた。ある年烈しい饑饉が襲つて來て、其の領内の民に非常な苦みを與えた。畑も野も荒廢して、世の終りが來た樣な有樣である。此の苦みの人々の間に二人の商人が來た。彼等は惡魔が假りに姿を變じたものであつた。彼等は多くの金を持つて居た。そして此れを以て饑えて死なうとする人の靈を買つた。伯爵夫人は富を持つて居た。ところが惡魔はこれを盜み去つてしまふ。從つて今は人々を救ふべき手段が無くなつてしまつた。夫人に遂に意を決して、其の靈を惡魔に賣り、此れに依つて得た莫大の金を人々の間に分ける。人々はこゝに苦みを逃れる事を得た。けれども夫人は靈を失つたゝめに死んでしまふ。しかも神は彼女の罪を許す。

此の作が千八百九十年始めてダブリンに演ぜられた時にはキャソリックの教義からして、非常な反對を受けた相である。其れは假りにも惡魔に其の靈魂を賣

つた女が、罪を許されるのは間違つて居ると云ふのである。それから又一方には、假令如何なる事情の下にも、愛蘭人は此の樣な罪を犯す事を敢てしないといふバトリヲティズムからの抗議もあつた。この初演後作家は種々に此の作を改訂して、其の改作は千九百十一年アベイ座に演ぜられた。此の時には惡魔の商人が退場してから、特に新らしい場面が附いて、最後に天使の言葉として神は行爲(ディード)よりも動機(モーティヴ)に重きを置くといふ意味が述べられて居る。卽ちこういふ句である。

……; The Light of Lights
Looks always on the motive, not the deed,
The Shadow of Shadows on the deed alone.

「憧憬の國」(The Land of Heart's Desire) も空漠たる昔を時代とした、詩劇である。これは、前の「カウンテスキャスリン」と違つて其のモーティヴが明かに邪教的である。イェーツはフェアリーといふものを材として、いろ〳〵の詩を書いた。此の「憧憬の國」も亦フェアリーの不思議を書いたものである。此れに用ゐられた話は作家の著「愛蘭口碑」の中にも加へられて居るものである。或る一人の農夫の若い妻が無味な生活に疲れて居る。彼女は心の中に、或る不可解の喜びの存在を感じて、此れに憧憬れて居る。彼女の心は不滿である。此の不滿を免れたいためにフェアリーを呼ぶ。此の聲に應じて、一人のフェアリーの子供が姿を現はす。フェアリーは永生と喜びとの國のうれしさを歌つて其處に踊る。其の國では美しいもの丶亡びる事がなく、衰へといふ事も尠い。そして歡樂は

智恵で、時は永久の歌であると云ふ。ところが家の柱に掛つた十字架を見たフェアリーは非常に恐れる。そして此の家に居合はせた僧に懇願して、其れを別室に持つて行つて貰ふ。十字架が見えなくなると子供は勢を得て再び歌ひ且つ踊る。若い女は此れに魅された。フェアリーは女の魂を盗んで去る。其のあとに女は死ぬ。彼女の魂はフェアリーの歌つた永生の國へと運ばれたのである。此の小さい劇に現はれる人は皆親みやすく單純である。イェーツの想像力と其の美はしい言葉とは、空漠な昔の世の邪教的の空氣を美化して、此れに限りない詩趣を附與して居る。

此れにも增して幻想的なものにブローズで書かれた短かい一幕物「キャスリン、ニ、フーリハン」(Cathleen Ni Houlihan) がある。嘗て作家がレディグレゴリイに送つた書簡の一節に此の作に關して次ぎの樣な事が書かれて居る。

「或る夜私は殆んど眞に近い程はつきりとした夢を見た。其の夢には有福で、燈火の輝き、婚禮の話の交されて居る百姓家が浮んだ。此の家の中に長い外套を着た老婆が入つて來た。彼女は實に愛蘭に外ならなかつた。多くの歌に歌はれ、多くの話に語られ、多くの人が其のために死に就いたといふキャスリン、ニ、フーリハンが此れである。私は此れを小さな劇に書けたなら、外の人にも私の見た樣に、私の夢を見せる事が出來るだらうと思つた。……」

「キャスリン、ニ、フーリハン」は時代が千七百九十八年といふ事に成つて居る。キララに近い農家ではマイケルといふ若者が其の兩親や弟などゝ、明日に迫つた婚禮の事を語つて居る。素朴な此の場は、ファンタジイの始まりとして、後半

部とのいゝ對照をなして居る。遠くに人々の叫ぶ聲が聞える。程近いキララに佛蘭西人が上陸したのであつた。其所に一人の哀れな老婆が來る。其の名をキャスリン、ニ、フーリハンと云ふ。此れは愛蘭の傳說的の女で國に何か變事の起る際に、國內を歩き廻るものとされて居る。此の老婆は今マイケルの家に來た。そして他國人のために家も地面も取られてしまつた事を告げ、過去の多勢の男達が己れに對する愛のために死んだといふ事や、今自分のために死なうとして居る者の事などを話す。自分を助けるのは骨の折れる仕事だ。紅い頰が蒼い頰に變るだらう。今自由に野山を歩き廻つて居る者も、遠い國の堅い町を歩まなくては成らなく成る。しかも此等の苦みをして猶人々はよい報いを受けたと思ふだらうといふ樣な意味の不思議な言葉が此の老婆の口から出る。老婆は己れの話に耳を傾けたマイケルに、自分に附いて來ないかとすゝめる。青年は萬事を忘れ、己れの新妻となるべき娘をも棄てゝ、此の老婆の後を追つて去る。マイケルの弟が丁度其のあとに外から歸つて來た。人々は老婆を見掛けなかつたかと問ふ。彼は老婆は見なかつたが、女王の樣に歩む若い娘を見たと答える。ファンタジーは此のインプレッシヴな少年の言葉に終つて居る。

以上の三つは皆極め詩的な空漠としたものであるが、「羹の鍋」(The Pot of Broth) で作家は喜劇を試みた。其の材は口碑の中から得られたもので、能狂言の可笑味に似た感じを持つた短かい作である。此れは或る狡猾な乞食が一つの石を種に便つて、慾の深い老婆の羹をうま〳〵と我がものにした話である。すべてが輕い滑稽で、且つ昔らしい間の伸びた感じに充ちて居る。

「幻の海」(Shadowy Waters) はイェーツの美しい想像力を最も發揮した詩劇である。一人の海賊の王と或る美しい王妃との戀は繪の樣に此の中に描かれて居る。此の海賊の王は普通の歡樂に倦きた人である。彼は一艘の船に乘つて、たゞあてもなく幾日を、不思議な海鳥の啼き聲をしるべに、憧憬の國を求めながら、廣い大海を、世界の果てへと進んで行く。彼は其の心の空虛を充たす事を唯一の願ひとして生きて居る。夢の國に向ふ幾日かの航海の後、彼の船は一艘の船の來るのに逢つて、忽ち此れを分捕つた。此の船にはデクトラと呼ばれる美しい女が乘つて居る。デクトラは海賊の王を愛した。けれども彼女の戀が、己れの求めるものとは相違して居たので、男は少しも此れを喜ばない。ところが忽然としてデクトラの心は變化した。そして今は彼女の心から限りある人間の戀は去つた。二人は始めて互ひに心の空虛の充たされたのを感じた。永生の喜びが遂に二人を見舞つた。海賊の王は女の髪に手を觸れながら彼等が不死(インモータル)に成るのを喜ぶ。

此れは前の數篇よりも更に空漠である。そしてローマンティックな美しさに濃く彩られて居る。其の代りに作中の人物は唯アトモスフィアを形成する以上の働きはして居ない。けれども老いた海賊の王、美しいデクトラ、果知らぬ大海、古い不思議な竪琴、灰色の海鳥などすべて美しい夢である。詩人としてのイェーツの天分はよく此の作に動いて居る。

「ベイルの濱」(On Baile's Strand) も亦昔時の英雄を材とした神秘の色の掛つたものである。此のクーチュレンが或る若い男と戰つて、此れを殺し、其のあとで

此れがアヲーフの國に自分の殘して來た血を別けた子供であつた事を知つて、狂氣の如くに海の中に躍り入つたといふ話は、レディグレゴリイの書いたもの、中にもある。イェーツは此の作に愚者と盲人を配して一種アイロニカルな感じを加へて居る。盲人は萬事を知つて居た。彼は此の悲劇を未前に防げば防く事を得たのである。而かも彼は此の悲劇に人々が氣を取られて居る中に、食物を盜まうといふ計畫のために此れを敢てしない。悲劇は此の盲人の言葉に終つて居る。

「家の中には誰も居つこはない。こつちへ來ないか。竈の中へ手を突つ込まう。」

「砂時計」(The Hour Glass)も亦口碑から來たもので、此れは賢者が一人の小兒の信に依つて、永久の罪から救はれたといふレディワイルドの「愛蘭昔話」に收められた話に依つたものである。イェーツはたゞ此れを次ぎの樣に變化して扱つた。一人の賢者が居る。彼は宗教を信じない。彼の學才は遠近に知られて、其の教えを受けるものが頗る多かつた。ところが彼の弟子は男女とも總べて宗教に信を置かなく成つてしまふ。其の間に唯一人の愚者が居て賢者の賢を笑つて居る。一日突如として天使が賢者の家に現はれた。天使は賢者に彼が一時間の中に死なゝければ成らない事を申渡し、若し其の生前に神を信ずる人間一人を見出したならば、地獄に行く罪だけは許すといふ。賢者は驚いて多くの弟子や、子供や、其の妻迄も呼んで尋ねたが、彼等は皆信を有して居ない。賢者は最後に愚者を發見した。愚者は其の信を以て賢者を救ふ。賢者は砂時計の最後の砂の落ちると共に死んだ。けれども彼の死は平和であつた。此の時今迄の愚者は賢者

に變じた。彼の信はインスティンクトである。多勢の人々が賢者の死を見て驚く時彼は云ふ。

「あの口から出たものを御覽……小さな、ふわ〳〵したものだ……戸のところに行つた。」（天使が戸口に現はれ、其の兩手を伸ばし、やがてまたすぼめる。）「天使が手の中にあれを取つた……あの手を天國の園で開くだらう。」（人々は總べて跪く。）

「デアドラ」(Deirdre) は多くの愛蘭作家に用ゐられる、美しく悲しい物語である。イェーツは此の短かい詩劇にデアドラと其の愛人との最後の場だけを書いた。此の作にも美しい詩趣はあるが、全篇の熱と力に於て到底シングのものと比べては遜色がある。唯シングは最後にコノチャーを戰に敗れ、戀を失つた老人として非常に衰えたものにして居るが、イェーツは寧ろデファイアントなものとした。

「緑色の甲」(The Green Helmet) も亦英雄を材としたものである。作家は此れをヒーロイックファースと呼んで居る。そして最も幻想的な作である。

レゲーアとコナルの二人が丸太小屋の中に恐れを抱いて語つて居る所に、クチュレンが歸つて來る。二人は彼に其の不安を物語つた。それは或る夜の事であつた。彼等は此所に座つて酒を飲んで樂んで居た。其の時海から不思議な男がやつて來た。彼は赤褐色の着物を着て、半ば閉ぢた眼と、大きな笑つて居る樣な口とを持つて居た。彼も其所で一所に杯を乾した。やがて彼は非常なゲームをして見せると云つた。其のゲームといふのは、若し彼等が彼の首を叩き落し

たならば、自分が其の代りに彼等のを叩き落さうといふのである。彼等は彼が首を叩き落されてから返報をする事の不可能なのを説いたが、どうしても通じない。遂にコナルは一撃に其の男の首を叩き落した。けれども地上に落ちた首は笑つて居る口を持つて居た。首を叩き落された男は、其の首を自身に拾つて海の中に飛び込んだ。二人の杯が空に成つた時、男は首を肩に載せて海の中から歸つて來た。そして彼は己れの權利を告げて、十二ヶ月の中に返報に來ると云つて何處ともなく去つてしまつた。二人の話は此の樣な不思議なものであつた。ところが約束の十二ヶ月は今日で終る。二人の運命は今夜盡きるのである。其の中に赤いマントの樣なものを着た恐ろしく、背の高い男が戸口に現はれる。クチュレンは首を叩き落したいのならば、自身のを落したらばよからうと云つて

怯まない。不思議な男は、此れがすべて自分の笑談だつたのだと云つて、其の場に一つの甲を置き、最も勇敢なものが此の甲の主に成るであらうと告げて姿を隱す。其のあとに此の甲の持主に就ての爭ひが起り、三人の男の妻其他も加つて騷ぎは增大する。そこに忽如として異樣な者が再び現はれる。室内に點ぜられて居た灯は黑い三つの手に依つて消されてしまふ。唯海の方から來る光が室の中央に立つ「赤い男」の姿を見せる。彼は兼ねての貸しを今取り返しに來たと云ふ。クチュレンは其の妻の泣いて止めるのをも構はずに、犧牲と成らうとして「赤い男」の足下に跪く。不思議な男は甲を取り上げた。そしてクチュレンの勇氣を賞して、此の甲を彼の頭上に載せる。此の作には「赤い男」「黑い男」「猫の首をつけた男」などが出て、隨分奇怪(グロテスク)な感じがする。

しかも二人が不思議な男の首を叩き落した時の話などはよく書かれて居ると思ふ。

Con. Till I could stand it no longer, and whipped off his head at a blow,
Being mad that he did not answer, and more at his laughing so,
And there on the ground where it fell it went on laughing at me.
Lag. Till he took it up in his hands
Con And splashed himself into the sea.

○「王宮の入口」(The king's Threshold) では主人公が古の詩人と成つて居る。彼は王の食卓の上席を占めて居たのを、軍人や法律家などに此れを讓らなければならなくされたのに不滿を感じて、王宮の入口の階段に座し、倦く迄も此所を動かず、人のすゝめる食も取らないで、餓死しようと試みた。

古の世に住んだ詩人の自尊を借りて、作家は詩人の意氣を揚げた。他の政治など、同樣に、詩が愛蘭に對して極めて重要なものである事を叫んだものとも云える。

自分はまだ「虛無の鄕」(Where There is Nothing) を讀んで居ない。唯此れは心の狂つた男を主人公として「事實(ファクト)の專制」に對する、謀叛(レヴォルト)を描いたものだといふ事を知つて居るだけである。

兎に角以上はイェーツの劇の大體である。總べての作を通じて流れて居るのは「詩人イェーツ」のイマジネーションである。此等の諸作は十九世紀末から廿世紀の初期に掛けての新らしい詩劇作家として、極めて優れた價値をイェーツに與

えて居る。且彼の詩劇は愛蘭といふ一地方に限らず、世界の劇壇に獨特の地盤を獲た。

イェーツの劇は愛蘭の實生活を傳える事には或ひは忠實でないかも知れない。しかもアメリカの評家ウェイガントの云つた樣に「彼の詩の空氣が、全く愛蘭の空氣に外ならない」事は彼の作品に親しみを持つ人々の明かに認めるところであらう。

レディ グレゴリイ
Lady Gregory

愛蘭の新らしい文藝は、熱心な一部の人に育てられ、培はれて今日に至つた。特に愛蘭劇と云ふものゝためには、イェーツ、レディグレゴリイの二人が殆んど一身を捧げて來たと云つても過言でない。愛蘭のダブリンはアベイ座と云ふ小やかな劇場を持つて居る。此の小さな劇場は、登場俳優の數も極めて少いのにも關はらず、其の眞摯な藝術的な演技を以て、世界の注意を受けて居る。レディグレゴリイとイェーツの二人は種々の苦心と戰ひながら、此の劇場を經營して來た。此の劇場は多くの愛蘭作家の作品を上場する機關と成り、遂にシングの天才をも世に知らせたのである。レディグレゴリイもイェーツの如く、澤山の戲曲を書いた。此等は皆其の劇場に用ゐる目的で書かれたのである。自分は愛蘭の劇作家を思ふ毎に、露西亞の國民樂派創設當時の話を聯想する。此の二つは何

れも鄉土の藝術を理想として進んだ。彼等の取材は鄉土的であり、其の作品も從つて鄉土的である。しかも此の兩者は極めて眞摯に其の目的に向つて進んだ。そして其の作品が鄉土といふものに限られたところはあるが、藝術的價値の極めて高いため、近年益々世の注目を惹く樣に成つて來た。世に女の小說家は多いが、劇作家として有名なものは餘り無い。此の中にあつてレディグレゴリイが確かに其の第一人と成るべき資格を持つて居る事は、其の作品に親しみを持つて居る人の誰も異論の無い事であらうと思ふ。

レディグレゴリイは「ムーアスィームの クーチュレーン」「神と戰士」「聖僧と不思議」其他の著に依つて、愛蘭の傳說口碑等を新らしく世に傳えた。古い詩趣に富んだ、野性の愛蘭は此等の書に依つて、長く後世に殘る事が出來る。

レディグレゴリイは隨分多くの劇を試みた。其の中には喜劇、悲劇、史劇等がある。けれども最も得意をするのは喜劇である。其の喜劇は愛蘭人特有の優れた想優力と、輕い心地よいユーモアと、作家獨特の機智と、倦く迄も自然な人々の科白といふ樣なものゝ結晶である。作家は愛蘭の上流から下流に掛けて、深い接觸を試みて居るので此等のすべての階級、特に中流以下の人々に對しての理解と同情とが、其の作の中に輝いて居る。そして作全體が何となく品のよい感じを有して居る。

『レディグレゴリイは最大の愛蘭婦人である。彼女の作は一般の愚人が云ふ樣な「人を娛ませる」といふ事以外に常に一つの力を有して居る。其れは彼女の作を見て居る我々の心から、倫敦や、芝居の息苦しい空氣などゝいふものゝ總べて

を忘れさせる事である。彼女の作は皆愛蘭に對する眞の愛から書かれたもので、丁度モリエールが佛蘭西人を寫した如くに、彼女は愛蘭人を描く。そして奇體にモリエールに似た才能を持つて居る。」此れはバーナード、シ　ウの評語の一節である。

自分は順序として先づ其の「七短篇集」に收められたものから書き始める事とする。

此集の第一は「うわさ」(Spreading the News) である。此れは落語にでもありそうな話の聞き違ゐから、村人の一人が他の一人と喧嘩して、此れを撲り殺したといふうわさが口から口へ傳つて、村中の大騒動と成つた事を書いたものである。うわさを好み、うわさに饑えた貧しい村の無智な人々がよく躍動して居るものである。

「ハイアシンス、ハルヴェイ」(Hyacinth Halvey) は作家の作中最も廣く知られたものであらう。

ハイアシンス、ハルヴェイといふのは一人の青年の名である。彼は小さな町に職業を求めに來た。ところが彼の持つて居た澤山の證明書は無暗に此の青年を讃めたものであつたゝめ、此れを見た町の人は、彼を非常な偉い人物だと誤解してしまふ。ハルヴェイは此れに弱つて、故意に其の名聲を拂ひ落さうと先づ羊を盗んだ。けれども其れは肉が食用に堪えないものであつた。其の時丁度巡視の役人が來たが、ハルヴェイが此れを盗み去つたゝめに、肉屋は處罰されずに濟んだので、却つて彼に感謝する。ハルヴェイは今度は教會の喜捨金の中から一圓(一ポンド)

廿五錢(クワウン)を盗んで此れを手傳ひの、ファーディといふものに與えた。ところが此れが發見されて、人々はファーディを罪人と定めてしまふ。此の時ハルヴェイは自分が其の犯人だと主張したが、誰も之れを信じない。そして却つて他人のために、身を犧牲にしようと彼が試みて居るものと思つて、其の德に感じる。人々は彼を椅子に掛けさせたまゝ、此れを擔ぎ上げて、「ハイアシンス、ハルヴェイ萬歲」を唱える。想像力と機智とは全體を通じて烈しく流れて居る。

「月の出」(The Rising of the Moon) は一種飄然とした詩趣と、現實的の諷刺との混合した不思議な感じを持つた喜劇である。作中の人物は極めて愛蘭的である。

波止場(ポイント)に巡査が居る。彼等は或る懸賞の重大犯人を捕えやうとして見張つて居るのである。巡査の一人が殘つて見張りをする。其所に一人の襤褸を着た歌うたひが來る。しまいに此の男が懸賞の罪人だといふ事が解つた。しかも巡査は愛蘭人としてのパトリヲティズムから、英蘭のための義務を棄てゝ此の男を逃してやる。男は厚く禮を述べ、他日我々が位置を顚倒した際には、報恩をしようと云つて去る。作家は此の作に關して、其のノートの中に此んな事を書いてある。

「私は小さい頃よく年上の者に連れられて、ギャルウェイの川に鮭捕りに來た。其の川は監獄の傍を過ぎて居る。私は人の絞殺されるところの窓や、暗い閉ぢられた門を、恐怖を以て眺めるのを常とした。そして若し、どうかして囚人があの高い塀を登り越し、暗にまぎれて堀割りから波止場に出、此の作に出た歌うた

ひの男の様に、漁船に乘つた友達と出會つて、積み上げた海草の下に隱れたらば、どうだらうと想像して居た。此の作は或る極端なナショナリストからは、其の上演前に有害だと思はれた。其れは作中の巡査が餘りに寛大だからと云ふのであつた。また此れの上場後ユニヲニストの新聞は、此れに現はれる巡査が『卑怯者且つ叛徒』の様であるといふ點から攻擊した。けれどもベルファストの巡査のストライキ以後、此の新聞は、愛蘭の氣質に對する觀察力の强い事を以て、今度は此の作を賞讃した。此等の褒貶以後、此の作は愛蘭海(アイリッシュシー)の兩側から何の攻擊をも受けずに過ぎて居る。」

「ジャックドー」(The Jackdaw)は前の「うわさ」と同じ技巧に依つて居る。ジャックドーといふ鳥に似た鳥を中心として輕快な可笑味に滿ちた喜劇が出來上つて居る。

或る女が小さい町に店を持つて居たが、十磅の借金のために裁判に呼び出される事に成る。此の女の一人の兄弟は此の事を聞いて、離れた町から此の村に來た。彼は金を出して面倒を片づけようとしたが、其の金を出したゝめに、更にいろ〳〵と金策を持ち掛けられる事を嫌つて、丁度店番を頼まれたネスターといふものに相談した。そして此の男の智惠に任せる事として金を置いて去る。そのあとに女が歸つて來る。ネスターは一生の智惠を振つて、彼女の留守中に一人の見知らぬ人が來て、此店に飼つてあるジャックドーを買つて行つたと話して、其の代金として十磅を取り出して渡す。ところが此れを得た女は、裁判所に行つて、此の仔細を隅から隅に聞える樣に語つた。此れを聞いた村人は皆色め

き立つて、我れも〳〵とジャックドーを捕りに行く。自分の金が原因だといふ事を夢にも知らないで、女の兄弟迄も其の中に加はる。裁判所では此のジャックドーを買ひに來た有福な旅人を午餐に案内しようと迄定める。

レディグレゴリイの書き方で面白いのは、此れでも「ハイアシンス、ハルヴェイ」でも、しまい迄間違いが判明せずに居る事だと思ふ。ハルヴェイは人々の誤解を振り棄て樣として、却つて有德の君子と思はれた。此の「ジャックドー」でも、ネスターがしまいに間違いの仔細を話しても、一人として此れを了解するものがなくて終つて居る。

「貧民院の病室」(The Workhouse Ward) に成つて、作家の筆はセンチメンタルの喜劇に轉じたと云はれて居る。此の短かい一幕物は、ほんの二人の老いた貧民の對話に過ぎない。しかも二人の言葉には愛蘭人特有の感じが充ちて居る。彼等は互ひにいろ〳〵の空想や回想を語つて、遂に爭論を始める。其處に一人の婦人が入つて來て、老人の一人を連れ出して行かうとした。けれども老人は友達を一人殘して行く事を肯じない。女は怒つて出て行つてしまふ。其のあとで二人の老貧民はまた前の如く爭論を始め、遂には其の塲にある品物を手當り次第に投げ合ふ。

孤獨で樂に暮すよりは、貧しくとも爭論に暮す生活を望むところが、愛蘭人氣質の一部の反映であらう。

作家自身ノートの中に「私は時々此の二人の貧民は愛蘭の我々の象徴だと考える」といふ樣な事を書いて、「寂しいよりは喧嘩する方を好む」のを愛蘭人の性

質だと述べて居る。

次ぎの「旅人」(The Travelling Man) は小さい神秘劇である。或る子供と其の母親と、旅人に姿を變じた神の三つが、此の小さい作の中心と成つて、神秘的と云ふよりも、作家特有の親みやすい感じを與えて居る。此の作のノートに書かれた話は全く此の作自身を説明したものである。

『或る夜一人の貧しい少女が宿るあても無い道を歩いて居た。其の時神が彼女の前に現はれて「灯の見える家に入れ。其所では女が死んだ。そしてお前を入れて呉れるだらう。」と告げた。少女は其の通りにした。彼女の入つた家には女が死んで居た。其の傍には女の夫や、他の人達が居た。けれども少女は其等の人々にも増してよく働いた。其の結果彼女は其家に住む事と成り、半年の後男は彼女を妻とした。或る日女が外に出て、麥の袋をいぢつて居た時、神が再び現はれた。其の時神は貧民の姿をして、麥の幾粒かを女に乞ふた。けれども女は馬鈴薯で澤山だらうと云つて、召使ひの小女に家の中から其れを持つて來させた。神は其れには構はずに、袋の中から九粒の麥を取つて、其の儘去つてしまつた。ところが不思議な事には袋の中の麥はすつかり無くなつてしまつた。此れを見た女は、神のあとを追つて行つて、許しを乞ふた。神は「お前は行くところもなくて困つて居た夜の事を覺えて居るか。あの時自分はお前を今の樣ないゝ家に送つてやつた。それを今に成つては、たつた僅かの麥さへ呉れようとはしない」と彼女を責めた。女はあなたは、何故それを分けるのを喜ぶ樣な心を私に下さらなかつたのです一と云つた。すると神は「此れから以後、澤山物を持つて

居る時には、自分のためにだと思つて、惜まずに分ける様にするがよい」と教えた。』

「旅人」は此の小さい話の飜案である。勿論事件は此の話と同一ではないが、神と神を忘れた女とは同じ様な動き方をして居る。

「監獄の門」(The Gaol Gate) はレディグレゴリイの悲劇中最も感じの強いものである。暗い監獄の門に寂しく出獄する夫を待つ其の妻と母と曉の空氣と、囚人が絞殺されたといふ知らせとが集つて此の一幕物をなす。處刑された囚人は、其の隣人の二三と共に收監された。其の妻も母も彼の無罪を信じて居た。ところが門衛の語るところによれば、彼は絞罪に處せられた。而かも彼以外の者は皆無罪と決つて放免されたと云ふ。此れを聞いた老いた母親は一時は悲んだが、

彼が隣人のために死んだ事に無上の誇りを感じる。

自分は此れにも亦作家のノートを引き度い。特に此れは自分のうれしく讀んだものであるから。

「私は或る人がこんな事を話すのを聞いた。其れは一人の男が、其の兄弟の出獄を迎ひに監獄に行つたところが、囚人は牢内で死んでしまつて居たといふ話である。

私は或る日ギャルウェイに行かうとした。ところがゴートの停車場でクロークを着、ショールを被つた二人の田舍女の來るのに逢つた。此の二人は、親類の男が濠洲に遣した金の事に就てギャルウェイに行つて、役人に逢はなくては成らないのだといふ事であつた。此の二人は孰れも自分の村の數里先き以外に出た

事のない者だつたので、まるで此の旅に『沼地の中の盲の獸』の様な不安と恐れとを感じると語つた。そこで私は其の一日中二人の世話をしてやつた。

エーセンリーからの道で官吏が擊たれた。そして數名の嫌疑者が捕はれた。其の中の一人は私の知つて居る若い大工であつた。やがて此の男が他の者を告訴したといふ風評が村中に傳はつた。囚人達が裁判所へ引き出されるので橋の上を渡つた時、彼は人々から罵倒の言葉を浴びた。けれども此の風評の誤りであつた事が解つた。そして彼が家に歸つて來た日に、人々は、ボンファイアをして彼を祝つた。

數ヶ月の間に起つた此等の三つの出來事は此の小さい劇に編まれて、僅か三日で彼等自身を書き、若しくは書かれた。私は此の卷中の他の作と比べて、此れを最も好んで居る。そして決して其の中の一語をも變じない。」

「幻影」(Image) は極めて奇想的の三幕の喜劇である。作家は此の作の中に、現實に依つて破壞される幾つかの幻影を書いた。作中に現はれる一人は心の秘密は倦く迄も心の中に秘めて置くのが最もよいと云つて居る。作家のノートに依れば、始まりは「我が秘密は我がものし」といふ樣な題が、此の作に與えられる筈だつたといふ事である。

或る村に大暴風雨があつたが、其の翌朝濱邊に二頭の鯨が打ち上げられた。此れを發見した人々は、此の鯨の油から得る利益の處分に就て、種々の議論を戰はし、其の結果或る紀念碑を建てる事に決する。ところが彼等が空論に耽つて居る間に隣村の者が一頭の鯨からは油を盜み取つて行つてしまい、他の一頭は

大波が渫つて又海の中に運び去つてしまつた。從つて紀念碑建立其他のすべての幻影は皆消滅せざるを得ない事と成る。しかも幻影製造者の一人は今後死ぬ迄話の種に盡きる事だけは無いと云つて自ら慰めて居る。

作家は獨特の機智を以て、此のファンタジーに美しい光彩を與えて居る。併し作家は此の作の モーティヴに就ては 極めて眞面目である。幻影の破滅は描かれたが、しかも作家自身此等の幻影の 製作者を 愛して居る。そして 若し此等の夢想者(ドリーマー)が彼等の夢を口外しなかつたならば、世の中は重苦しい倦怠に堪えぬものと成るであらうと云つて居る。

自分は筆を轉じてレディグレゴリイの喜劇と喜悲劇とを書く。「愛蘭野史劇」と稱せられる二卷に載せられた六篇がそれである。

其の第一のものを、「グラニア」(Granie) と云ふ。此れは三幕の悲劇であるが其の主な登場人物は僅かにグラニアとフィンとディアムイドの三人である。グラニアは強いフィンといふ王の后と成る筈であつた。然るに其の結婚式以前にディアムイドといふ美しい若者を見て直ちにこれを愛し、フィンを棄てゝしまふ。かくして二人は七年を過した。けれどもディアムイドはフィンに對する忠義の念からグラニアを妻として取扱はなかつた。七年の後ディアムイドはグラニアを奪ひ去つた外國の王と闘つて手傷を負ひ遂に其の爲めに死んでしまふ。フィンは此の時に現はれて、長い間彼の胸中に保有して居た愛をグラニアに語る。グラニアはディアムイドの死を嘆いた。けれども彼が其の臨終にフィンのみを思つて、彼女の事が念頭に無い樣子なのを見て、著るしい不滿を感じ、遂にフィンの愛

が彼のものよりも遙かに強く且つ純粋なものだと云ふ事を悟つて、敢然として其の手を取る。

グラニアの心理は勿論此の悲劇の中心と成り、其の最後の彼女の心の變化は最もよく書かれて居る。けれども悲劇として此の作は强味を缺いて居る。そして何れにしても主な登場人物が僅かに三名であるから、三幕では長過ぎる。此れはレディグレゴリイの企てた中での最も野心の多い試みであるが、其の結果は成功とは云ふ事が出來ないと思はれる。

次ぎの「キンコラ」(Kincora) は十一世紀を時代としたもので、キンコラに住んだ有名な王ブリアンの死が書かれて居る。此れは史劇としてレディグレゴリイの最初の試であると云ふが、一種のメロドラマで、寧ろ失敗して居る。此の失敗は作家が餘りに歴史に據り過ぎた事に歸因すると云はれて居る。

史劇中の悲劇三種の中では最後の「ダーヴォーギラ」(Dervorgilla) が最も優れて居ると自分は思ふ。此れには悲劇としての强味がある。尠くも前の二つに比べては强味が深い。

ダーヴォーギラは一人の婦人の名前である。彼女はブレフニイの王オールークの后であつたが、後レインスターの王のマックローといふものゝ后に成つた。オールークは其の友人達と共に復讐のためにレインスターに攻め入つた。ダーヴォーギラは美貌を以て知られて居た。そして其の美貌を以て、男を魅して居たのである　レインスターの王はオールークの軍勢を防ぐために愛蘭のヘンリイ二世に賴んでストロングボウの率ゐる一隊の加勢を得、ストロングボウには報

酬としてレインスターを與える事とした。此れが英蘭人の愛蘭に入つた最初である。そして此の事を惹起したのはダーヴォーギラである。ダーヴォーギウは此れが爲めに人々から國の仇と見做されて、寂しい世を送つた。

レディ・グレゴリイの戯曲は既に老婆と成つたターヴォーギラをあらはす。彼女は深く其の素性を秘して、僧院の中に住んで居る。そしてたゞ氣高い、慈悲の心にたゝい老婦人として人々から敬はれて居た。丁度競技會が催されて、勝者達は皆彼女の賞品を得て喜んで居た。ところがふとした事から彼女がダーヴォーギラであると云ふ事が人々に知れた。此れを知つた人々は皆彼女の罪を許し衆ねた。彼女から賞品を受けた青年達は皆一人〳〵靜かに彼女の前に來て、貰つた賞品を其の塲に置いて去つて行つてしまふ。彼等が一人〳〵歩み寄つて無言で賞品を置いて行く毎に、老いたダーヴォーギラの心には新らしい悔恨と謝罪の念とが湧く。若い者達の此の行爲が彼女には神の裁斷の如くに感ぜられた。ダーヴォーギラは犯した罪に責められながら、獨り夕闇の中に殘される。

遠くから歌うたひの唄聲が聞えて來る。

此の最後の場は極めて印象の深いものである。

同じ史劇に屬する三種の喜悲劇の中では最初のものに「キャナヴン家」(Canavans)がある。此れはエリザベス女皇時代を背景とした作であるが、三幕物として取扱はれる程の價値を有して居ないものである。

其の次ぎの「白の帽章」(The White Cockade) はジェームス二世の優柔を描いたもので、其の中に在るボインの戰の後にジェームス二世が酒樽の中に隱れて逃

れた茶番は最も輕妙に書かれて居る。けれども此れもそれだけの話である。

最後の「救世者」(The Daliverer) で作家は愛蘭の不遇な愛國者バーネルの事を書き、偉人が如何に俗衆から棄てられるかをアイロニカルな筆で描いて居る。アイロニカルな事に於てはレディグレゴリイの作中第一のものであらう。

けれども此の作家の特色は畢竟喜劇にある。

昨年發行された「新喜劇集」には、すべて〻五曲載せられて居る。第一は「煙突掃除夫」(The Bogie Men) である。此の作には二人の煙突掃除夫が描かれた。彼等は互に其の親から互の甥の裕福な立派な事を話されて、それを信じて居た。二人は或る日乘合馬車の待合所で出逢つた。そして其の結果二人の素性がわかつて、お互が空想の中の甥同士である事に驚かされた。二人は始め其の想像の

あまりに烈しく打破されたのに驚いたが、やがて勇氣を取り返した。事實二人は此れ迄の間甥の事を考へるのが甚しい苦痛だつたのである。ところが今此の恐怖と苦痛とは必要のないものと成つた。そして二人は互に自身の自由を新らしく感じて、新生活をアメリカに始めようとする。

第二は「滿月」(The Full Moon) と云ひ、此れは嘗てハイアシンス、ハルヴェイの現はれたクルーンの町を場所とし、ハルヴェイを始めとして「うわさ」のバートレイファロン、ショーンアーリイや「ジャックドー」のミセスプロデリックなども出て來る。ハルヴェイは此の作でクルーンで得た不相應な位置を棄てゝ何處へか去つて行く。此の作ではタニアンといふ男の犬が最も活動して、此の狂犬と、滿月のために精神に異狀を呈した人々が集つて、一種不思議な行動を取つて居る。

「外套」(Coats) と「デーマーの金」(Damer's Gold) も、大して問題にすべき作では無い。前者では二人の親しい新聞記者の、つまらない事に關しての爭ひと、其の和解を强いる人世の狀態の有する强い力が描き出され、後者では蓄財を好んで遂に己れの富に束縛されて居た男が、不意に其の富を失つてから、却つて自己の自由を感じて、新らしい生活に入らうとする事が書かれて居る。

最後の「マクドノーの妻」(Medonough's Wife) ではマクドノーといふ貧しい笛吹きを一個の藝術家として現はし、彼の不在中に何人の介抱をも受けずに悲しい死を遂げた其の妻の葬式に、其の死を悼んで吹いた彼の笛の音が、市に集つた多くの人々を皆寄せ集めて、此の哀れな女の葬式を最も盛大なものにした事を書いて、藝術家と藝術の誇が現はされた。

以上はレディグレゴリイの戯曲の目下出版されて居るもの丶全部である。

要するにレディグレゴリイの得意とするのは短かい喜劇にある。悲劇や史劇に於ては、其の中の科白のあるものは極めて美しいのにも關はらず、全體の强味と平衡とに缺けたところを生じて居る。けれども其の喜劇では、機智、觀察、諧謔等のすべてが、作中の人物をつゝんで一種獨特な輕い空氣を作り出し、「パイアシンスハルヴェイ」や「月の出」の樣な作品と成つて現はれて居る。

レディグレゴリイは實際現代の喜劇作家として、第一流の列に加はるべき作家である。そして愛蘭の平民の實生活を傳える事に於ては、他の何れの作家よりも巧妙で且つ眞をうつす事に成功して居る。

かくしてケルトの文藝復興に多大の功勞あるレディグレゴリイは、ウェイガン

レディグレゴリイ

トの言葉を借りれば「皆て英文學に見られなかつた美を以て、過去並びに現在の愛蘭の生活を描出した藝術家」として、人々の敬愛を受けて居るのである。

大正四年二月十九日印刷
大正四年二月二十二日發行

定價金壹圓

現代英國劇作家
奥付

著者　大田黑元雄　東京市麹町區平河町五丁目卅六番地
發行者　河本龜之助　東京市麹町區平河町五丁目卅六番地
印刷者　河本俊三　東京市麹町區麹町二丁目九番地
印刷所　洛陽堂印刷所

不許複製

發行所　東京市麹町區平河町五丁目卅六番地　洛陽堂
電話番町四二五八番
振替東京二〇九一四

357
122

終